

## 『太陽コーパス』における語彙素「あう」の用字法

高橋 雄太 (明治大学大学院国際日本学研究科)

### Character Usage of the Japanese Verb “AU” in Taiyo Corpus

Yuta Takahashi (Graduate School of Global Japanese Studies, Meiji University)

#### 要旨

語義と表記の固定が進んでいなかった明治大正時代を対象とする『太陽コーパス』を用いて、動詞「あう」に対する表記の実態と変遷を調査する。『太陽コーパス』では語彙素「会う」に対する表記としては「會」「逢」「遇」「遭」が存在するが、1895年では現代よりも自由に表記がなされていた。さらに、「近代文語 UniDic」では語彙素認定において「合う」と「会う」に二分しているが、用例を見るとこの二つの語彙素間でも表記の通用が確認できる。本研究では語彙素「会う」と「合う」を一つの語彙素「あう」として頻度を集計し、主要な表記「會」「逢」「遇」「遭」「合」を、用例分析をした上で動作対象を分類し、明治大正期の書き分けの実態と変遷を明らかにする。また、用例分析の結果によって判明した明治大正時代の用字法と、現代語の用字法や国語政策との関連も考察する。

#### 1. はじめに

近代においては、現代語と比較して自由に表記をしており、一つの語に対して表記が複数ある「同訓異字」が、明治大正期では現代語よりも多かった。近代語の同訓異字の研究では、京極(1998)や田島(1998)、コーパスを用いた研究では田中(2006)など、個々の語における成果が報告された。しかしながら、これら近代語の用字法の研究は数が少なく、特に資料が膨大な近代の研究に有効なコーパスはあまり活用されていない状況にある。

そこで本稿では、近代語の用字法の一つとして、『太陽コーパス』を用い、同訓異字を持つ語彙素「あう」における用字法について考えていきたい。

#### 2. 調査

今回の調査では対象として、経年的な観察が可能な『太陽コーパス』を用いる。『太陽コーパス』に含まれる1895年、1901年、1909年、1917年、1925年の5年分のデータに「近代文語 UniDic」による形態素解析を施し、各年の表記別の頻度表を作成する。対象とする語は動詞「あう」で、「近代文語 UniDic」では「合う」と「会う」を別語彙素として認定している<sup>1</sup>が、これらの間でも表記に通用が見られるため語彙素「あう」として括り集計をする。また、今回の調査では、「合わす」「合わせる」のような「あう」とは別語彙素に認定された語彙素<sup>2</sup>、及び補助動詞用法の「あう」は全て対象外とする。

<sup>1</sup> 小椋ほか(2011)では「UniDic」での語彙素の認定において、「会う」「遭う」「逢う」などは「に」が前接する点で共通していることから一つの「会う」という語彙素に認定し、「合う」と区別したとしている。「近代文語 UniDic」もこれに準じていると思われる。

<sup>2</sup> 特に「合わせる」については、「并」「併」など別表記が関係するため調査結果が複雑化したため、調査対象から外した。

## 2.1 調査の前に

以下の図1は、「あう」の各表記の年次別表記頻度を示したもので、各表記の頻度数の増減を知ることができる。なお、平仮名表記や頻度数が10以下の表記については対象外とした。

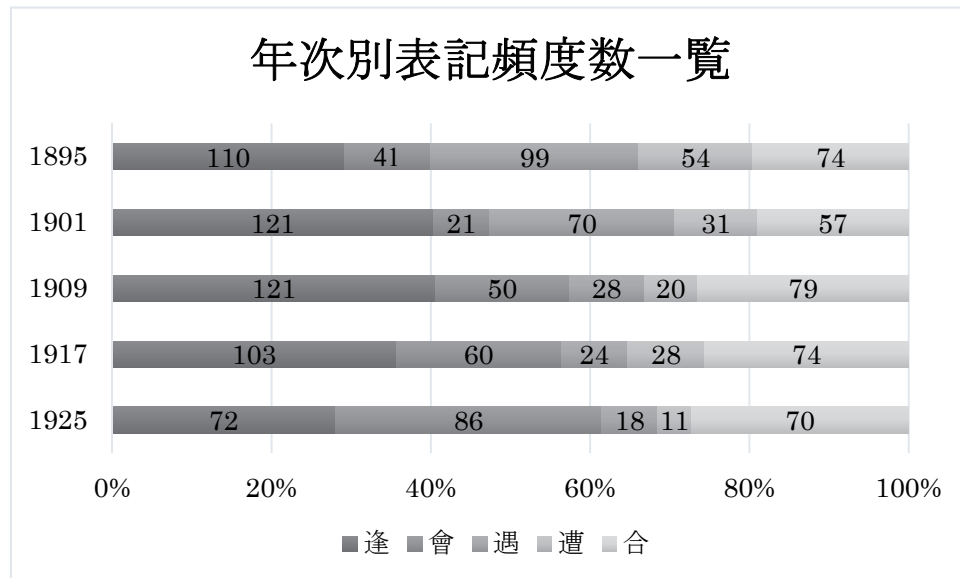


図1 動詞「あう」の主要表記の年別頻度表

代表表記となるのは「會（会の旧字体）」であるが、5年分の頻度数、及び1895、1901、1909、1917年の頻度数では「逢」が「會」を上回っている。1895年から1917年まで、「逢」は大きな減少もなく最大の頻度数であったことから、動詞「あう」の表記としては「逢」が一般的であったことが分かる。その他の表記も含めて見ると、「逢」「遭」「遇」が減少しているのに対し、「會」のみ頻度数が徐々に増えていき、1925年では「逢」と逆転している。一方で「合」は増減の幅が最も狭く、一定量使用され続けていることが分かる。

しかしながら、このような実態にある背景を考えるには、実際の用例を観察し、どの表記がどの用法と結びつくかを確認しなければならない。2.2では動詞「あう」の対象語を分類し、各表記の性質を探る。

## 2.2 用例分析による動作対象の分類と統計

2.1で述べた、動詞「あう」の対象語を分類したものが表1である。大分類の「人・もの」には物理的に相対することのできる対象語を、「イベント・環境」には世間や自分に起こった出来事や自身を囲む状況を表す対象語、「合用法」には現代語において通常「合」で表記する用法の対象語をそれぞれ分類した。

また、調査対象には以下の(1)、(2)にあるような「に格」に加えて、

(1)…私は後でどんな目に逢つて居るか分らぬ… (1909年「仏国に於ける寄宿舎生活」)

(2)…白川を固めて居つた伊治地正治に會ひまして… (1901年「追懐談」)

「と格」、数は少ないが「が格」や「を格」、明記していないが対象語が文脈から読み取れるもの、連体修飾節に含まれる「あう」も全て含んだ。

表1 動詞「あう」の対象語の分類

| 大分類     | 小分類   | 分類基準                         | 用例                                                  |
|---------|-------|------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 人・もの    | 人・生物  | 一般的な人、生物。<br>幽霊や仏も含む         | 母、子供、男、誰か、盗人、<br>先生、召使、韓人、教徒、提督、<br>大徳、幽霊、熊、獲物、蛇など  |
|         | 恋人    | 恋人に限った人                      | 愛人、女、二人、あなた、<br>二つの星、など                             |
|         | 物体    | 無生物の物体                       | 氷塊、石、船体、樹、難破船、<br>緑林、城郭、など                          |
| イベント・環境 | 出来事   | 身の回りや世間の出来事                  | 変化、開業、政変、故障、大赦、<br>禁輸、質問、検査、鞭撻、神隠、<br>ストライキ、批判、抗議など |
|         | 状況    | その場全体・状況、<br>「動詞+あう」含む       | 板挟み、惨状、危険、境遇、<br>この世、逆境、来たりすぎるに、<br>～起こるに、困難、難局、など  |
|         | 戦闘・攻撃 | 動作により身体が傷<br>つく行為            | 攻撃、砲撃、殺戮、殺害、夜討、<br>～の変、襲撃、大戦争、不意打、<br>乱、虐待、強盗、処刑、など |
|         | 精神・心理 | ～目とあるもの、<br>または抽象的な心理<br>的被害 | 酷い目、悲しい目、憂い目、<br>好い目、苦しみ、半死半生、禍、<br>不幸、災難、栄典、幸運など   |
|         | 時期    | 特定の時期                        | 正月、春、聖代、めでたい日、<br>秋の時、時勢、など                         |
| 合用法     | —     | 現代語で通常「合」<br>で表記する用法         | 趣旨、時勢、意見、尺、理屈、<br>気、辻褄、思想、性格、歩調、<br>調子、など           |

(1)の例ならば「どんな目に」とあるため大分類は「イベント・環境」に、小分類は「精神・心理」に分類する。(2)ならば「伊治地正治に」とあるため大分類は「人・もの」に、小分類は「人・生物」に分類する。

対象が似ている「人・生物」と「恋人」の分類の基準は、キーの前文脈と後文脈 50 文字ずつを読んだ上で、明確に動作主と被動作主が恋人の関係にあるもののみを「恋人」に、どちらとも言えない用例は全て「人・生物」に分類をしている。

では、はじめに、表記毎の分類別の比率を示した表 2 を見る。

表2 語彙素「あう」の表記別分類の比率

|        |         |       |       |       |       |       |
|--------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 「逢」499 | 人・もの    | 338   | 67.7% | 人・生物  | 304   | 60.9% |
|        |         |       |       | 恋人    | 27    | 5.4%  |
|        |         |       |       | 物体    | 7     | 1.4%  |
|        | イベント・環境 | 151   | 30.5% | 出来事   | 42    | 8.4%  |
|        |         |       |       | 状況    | 21    | 4.2%  |
|        |         |       |       | 戦闘・攻撃 | 22    | 4.4%  |
|        |         |       |       | 精神・心理 | 53    | 10.6% |
|        |         |       |       | 時期    | 3     | 0.6%  |
|        |         |       |       | 自然    | 11    | 2.2%  |
|        | 合用法     | 10    | 2.0%  | 合用法   | 10    | 2.0%  |
| 「會」289 | 人・もの    | 218   | 75.4% | 人・生物  | 214   | 74.1% |
|        |         |       |       | 恋人    | 2     | 0.7%  |
|        |         |       |       | 物体    | 2     | 0.7%  |
|        | イベント・環境 | 68    | 23.5% | 出来事   | 27    | 9.3%  |
|        |         |       |       | 状況    | 10    | 3.5%  |
|        |         |       |       | 戦闘・攻撃 | 4     | 1.4%  |
|        |         |       |       | 精神・心理 | 15    | 5.2%  |
|        |         |       |       | 時期    | 4     | 1.4%  |
| 自然     | 8       | 2.8%  |       |       |       |       |
| 合用法    | 3       | 1.0%  | 合用法   | 3     | 1.0%  |       |
| 「遇」266 | 人・もの    | 109   | 48.2% | 人・生物  | 104   | 46.0% |
|        |         |       |       | 恋人    | 3     | 1.3%  |
|        |         |       |       | 物体    | 2     | 0.9%  |
|        | イベント・環境 | 112   | 49.6% | 出来事   | 34    | 15.0% |
|        |         |       |       | 状況    | 24    | 10.6% |
|        |         |       |       | 戦闘・攻撃 | 11    | 4.9%  |
|        |         |       |       | 精神・心理 | 28    | 12.4% |
|        |         |       |       | 時期    | 4     | 1.8%  |
| 自然     | 11      | 4.9%  |       |       |       |       |
| 合用法    | 5       | 2.2%  | 合用法   | 5     | 2.2%  |       |
| 「遭」133 | 人・もの    | 17    | 12.8% | 人・生物  | 13    | 9.8%  |
|        |         |       |       | 恋人    | 1     | 0.8%  |
|        |         |       |       | 物体    | 3     | 2.3%  |
|        | イベント・環境 | 115   | 86.5% | 出来事   | 31    | 23.3% |
|        |         |       |       | 状況    | 13    | 9.8%  |
|        |         |       |       | 戦闘・攻撃 | 16    | 12.0% |
|        |         |       |       | 精神・心理 | 40    | 30.1% |
|        |         |       |       | 時期    | 1     | 0.8%  |
| 自然     | 15      | 11.3% |       |       |       |       |
| 合用法    | 1       | 0.8%  | 合用法   | 1     | 0.8%  |       |
| 「合」189 | 人・もの    | 3     | 1.6%  | 人・生物  | 3     | 1.6%  |
|        |         |       |       | 恋人    | 0     | 0.0%  |
|        |         |       |       | 物体    | 0     | 0.0%  |
|        | イベント・環境 | 4     | 2.1%  | 出来事   | 0     | 0.0%  |
|        |         |       |       | 状況    | 2     | 1.6%  |
|        |         |       |       | 戦闘・攻撃 | 0     | 0.0%  |
|        |         |       |       | 精神・心理 | 1     | 0.5%  |
|        |         |       |       | 時期    | 0     | 0.0%  |
| 自然     | 1       | 0.5%  |       |       |       |       |
| 合用法    | 182     | 96.3% | 合用法   | 182   | 96.3% |       |

それぞれ左には大分類、右には小分類を示し、各表記においてそれぞれの用法がどれほどの比率で使用されているかを示している。大分類をみると、「逢」や「會」は「人・もの」に「あう」ときに主に使用され、逆に「遭」は「イベント・環境」の用法で用いられやすいことが分かる。「遇」は「人・もの」「イベント・環境」のどちらにも等しく使用されている。「合」に関しては、若干の揺れがあるものの、「合用法」に分類される用例が約96%であり、明治時代・大正時代の時点で「人・もの」や「イベント・環境」で「合」を用いることがほぼ無かったことが分かる。

小分類でも同様に、「會」の「人・生物」用法への偏りが特徴的である。同様に「人・生物」の比重の大きい「逢」と比較しても、「人・生物」の比率が13%程度上回っている。これは「逢」が「人・生物」以外の用法でも頻度が高いことが原因と考えられ、「逢」はどの用法でも適切度が高かったことが言える。「遭」や「遇」に関しては、「時期」などの一部の例外を除いては、「イベント・環境」に属する小分類はほぼ全て高い比率である。

次に、語彙素「あう」の対象語別に各表記の頻度と比率をまとめると、表3になる。

表3 語彙素「あう」の対象語別の表記

| 大分類     | 小分類   | 「逢」        |            | 「會」        |            | 「遇」        |            |
|---------|-------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 人・もの    | 人・生物  | 338(49.3%) | 304(47.7%) | 218(31.8%) | 214(33.5%) | 109(15.9%) | 104(16.3%) |
|         | 恋人    |            | 27(81.8%)  |            | 2(6.1%)    |            | 2(9.1%)    |
|         | 物体    |            | 7(50.0%)   |            | 2(14.3%)   |            | 2(14.3%)   |
| イベント・環境 | 出来事   | 151(33.7%) | 42(31.3%)  | 68(15.1%)  | 27(20.2%)  | 112(24.8%) | 34(25.4%)  |
|         | 状況    |            | 21(30.0%)  |            | 10(14.3%)  |            | 24(34.3%)  |
|         | 戦闘・攻撃 |            | 22(41.5%)  |            | 4(7.6%)    |            | 11(20.8%)  |
|         | 精神・心理 |            | 53(38.7%)  |            | 15(11.0%)  |            | 28(20.4%)  |
|         | 時期    |            | 3(25.0%)   |            | 4(33.3%)   |            | 4(33.3%)   |
|         | 自然    |            | 11(23.9%)  |            | 8(17.4%)   |            | 11(23.9%)  |
| 合用法     |       | 10(5.0%)   |            | 3(1.5%)    |            | 5(2.5%)    |            |
| 全体      |       | 499(36.3%) |            | 289(21.0%) |            | 266(19.3%) |            |
| 大分類     | 小分類   | 「遭」        |            | 「合」        |            | 合計         |            |
| 人・もの    | 人・生物  | 17(2.5%)   | 13(2.0%)   | 3(0.4%)    | 3(0.5%)    | 685        | 638        |
|         | 恋人    |            | 1(3.0%)    |            | 0(0.0%)    |            | 32         |
|         | 物体    |            | 3(21.4%)   |            | 0(0.0%)    |            | 14         |
| イベント・環境 | 出来事   | 115(25.5%) | 31(23.1%)  | 4(0.9%)    | 0(0.0%)    | 450        | 134        |
|         | 状況    |            | 13(18.5%)  |            | 2(2.9%)    |            | 60         |
|         | 戦闘・攻撃 |            | 16(30.2%)  |            | 0(0.0%)    |            | 53         |
|         | 精神・心理 |            | 40(29.2%)  |            | 1(0.7%)    |            | 137        |
|         | 時期    |            | 1(8.3%)    |            | 0(0.0%)    |            | 12         |
|         | 自然    |            | 15(32.6%)  |            | 2(2.2%)    |            | 47         |
| 合用法     |       | 1(0.5%)    |            | 182(90.6%) |            | 201        |            |
| 全体      |       | 133(9.7%)  |            | 189(13.7%) |            | 1376       |            |

それぞれの表記の最下欄には、「表記毎の総頻度数」の「全表記の総頻度数」に対する比率が示してある。これを各表記の平均的な比率として、この数値を上回る分類については、その分類と表記が強く結びついていることを示す。

例えば小分類「恋人」における「逢」の表記は平均の36.3%を大きく上回り、81.8%にまで達している。ここから、「恋人」用法には基本的に「逢」が用いられていたことが言える。その他、「會」における「人・生物」や、「遇」における「状況」、「遭」における「戦闘・攻撃」「精神・心理」「自然」「出来事」「状況」が平均を大きく上回っている。

大分類では、「人・もの」は「逢」と「會」を合わせて8割を超えており、「人・もの」用法での「あう」には、基本的に「逢」か「會」が用いられていることになる。「イベント・環境」については、「逢」の総頻度数が499、「遭」の総頻度数が133という違いのため「逢」が占める比率が大きくなっているが、「逢」自体は「イベント・環境」用法よりも「人・もの」に多く使用されるため、見た目の数値以上に、「遭」や「遇」の「イベント・環境」における比率は高いと言える。また、「合用法」については、「合用法」の内9割が「合」ので表記されていることから、明治大正時代には「合用法」は書き分けがなされていたと言える。

### 2.3 「あう」の表記の変化

2.2では、『太陽コーパス』全体の「あう」の用字法を分析したが、ここからは1895年から1925年にかけての推移を分析する。

以下の表4は、1895、1901、1909、1917、1925年における各表記の大分類毎の頻度と比率を表した数値である。

表4 表記別の対象語の比率の推移

| 「逢」     | 1895 |       | 1901 |        | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
|---------|------|-------|------|--------|------|-------|------|-------|------|-------|
| 人・もの    | 53   | 55.8% | 63   | 57.3%  | 83   | 69.2% | 86   | 81.1% | 53   | 76.8% |
| イベント・環境 | 37   | 38.9% | 45   | 40.9%  | 36   | 30.0% | 18   | 16.9% | 16   | 23.2% |
| 合用法     | 5    | 5.3%  | 2    | 1.8%   | 1    | 0.8%  | 2    | 1.9%  | 0    | 0.0%  |
| 「會」     | 1895 |       | 1901 |        | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
| 人・もの    | 24   | 55.8% | 14   | 63.6%  | 29   | 61.2% | 57   | 82.6% | 94   | 86.2% |
| イベント・環境 | 17   | 39.5% | 8    | 36.4%  | 18   | 38.3% | 12   | 17.4% | 13   | 11.9% |
| 合用法     | 1    | 2.4%  | 0    | 0.0%   | 0    | 16.1% | 0    | 0.0%  | 2    | 1.8%  |
| 「遇」     | 1895 |       | 1901 |        | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
| 人・もの    | 29   | 34.9% | 41   | 57.7%  | 10   | 40.0% | 18   | 56.3% | 11   | 68.8% |
| イベント・環境 | 51   | 61.4% | 27   | 38.0%  | 15   | 60.0% | 14   | 43.8% | 5    | 31.3% |
| 合用法     | 3    | 3.6%  | 3    | 4.2%   | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  |
| 「遭」     | 1895 |       | 1901 |        | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
| 人・もの    | 7    | 13.7% | 2    | 8.0%   | 4    | 21.1% | 1    | 3.6%  | 3    | 30.0% |
| イベント・環境 | 44   | 86.3% | 23   | 92.0%  | 15   | 78.9% | 27   | 96.4% | 7    | 70.0% |
| 合用法     | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%   | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 1    | 10.0% |
| 「合」     | 1895 |       | 1901 |        | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
| 人・もの    | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%   | 2    | 4.7%  | 0    | 0.0%  | 1    | 2.3%  |
| イベント・環境 | 1    | 3.1%  | 0    | 0.0%   | 1    | 2.3%  | 1    | 2.6%  | 0    | 0.0%  |
| 合用法     | 31   | 96.9% | 31   | 100.0% | 40   | 93.0% | 38   | 97.4% | 42   | 97.7% |

「合」と「遭」には大きな変化はないものの、「逢」や「會」などは、1895年や1901年ではあらゆる用法で使用されていたが、後年になると「人・もの」に使用が限定されてくる動きが確認できる。「遇」については年によって比率がばらついており、変化の流れを捉えることができないことから、用法が定まっていなかったと考えられる。

次に、対象語別に表記の推移を表にすると、表5のようになる。

表5 対象語別の表記の比率の推移

| 人・もの    | 1895 |       | 1901 |       | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
|---------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|
| 「逢」     | 53   | 46.9% | 63   | 52.5% | 83   | 64.8% | 86   | 53.1% | 53   | 32.7% |
| 「會」     | 24   | 21.2% | 14   | 11.7% | 29   | 22.7% | 57   | 35.2% | 94   | 58.0% |
| 「遇」     | 29   | 25.7% | 41   | 34.2% | 10   | 7.8%  | 18   | 11.1% | 11   | 6.8%  |
| 「遭」     | 7    | 6.2%  | 2    | 1.7%  | 4    | 3.1%  | 1    | 0.6%  | 3    | 1.9%  |
| 「合」     | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 2    | 1.6%  | 0    | 0.0%  | 1    | 0.6%  |
| イベント・環境 | 1895 |       | 1901 |       | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
| 「逢」     | 37   | 24.7% | 45   | 43.7% | 36   | 42.4% | 18   | 25.0% | 16   | 38.1% |
| 「會」     | 17   | 11.3% | 8    | 7.8%  | 18   | 21.2% | 12   | 16.7% | 13   | 31.0% |
| 「遇」     | 51   | 34.0% | 27   | 26.2% | 15   | 17.6% | 14   | 19.4% | 5    | 11.9% |
| 「遭」     | 44   | 29.3% | 23   | 22.3% | 15   | 17.6% | 27   | 37.5% | 7    | 16.7% |
| 「合」     | 1    | 0.7%  | 0    | 0.0%  | 1    | 1.2%  | 1    | 1.4%  | 1    | 2.4%  |
| 合用法     | 1895 |       | 1901 |       | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       |
| 「逢」     | 5    | 12.2% | 2    | 5.6%  | 1    | 2.4%  | 2    | 5.0%  | 0    | 0.0%  |
| 「會」     | 1    | 2.4%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 2    | 4.4%  |
| 「遇」     | 3    | 7.3%  | 3    | 8.3%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  |
| 「遭」     | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 1    | 2.2%  |
| 「合」     | 32   | 78.0% | 31   | 86.1% | 40   | 97.6% | 38   | 95.0% | 42   | 93.3% |

「人・もの」では、1901年までは「會」よりも「遇」の占める比率が大きかったが、1909年以降徐々に「會」の使用が増えていき、1925年では90%以上が「逢」もしくは「會」で表記されていることが分かる。

「イベント・環境」では、1895年時点でも既に「遭」や「遇」の比率が大きいことが言えるが、1917年で「遭」の頻度が全ての表記を上回っていることは特筆すべき点である。なお、1925年は「會」や「逢」が高い比率になっているが、1925年は「遭」や「遇」の頻度がそれぞれ10例・16例と極端に少ないことが比率に影響しているため、参考にしない。

「合用法」では、いずれの年もほぼ全てが「合」で表記されているが、1895年と1909年以降を比較すると、1909年以降は、より厳密に書き分けがなされていたことが言える。

また、表5からは、各用法の頻度数の推移も知ることができる。表5を表記に関係なく集計したものが、表6になる。

表6 対象語の頻度の推移

|         | 1895 |       | 1901 |       | 1909 |       | 1917 |       | 1925 |       | 全体  |       |
|---------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|
| 人・もの    | 113  | 37.1% | 120  | 46.3% | 128  | 50.2% | 162  | 59.8% | 162  | 65.1% | 685 | 51.2% |
| イベント・環境 | 150  | 49.5% | 103  | 39.8% | 86   | 33.7% | 69   | 25.5% | 42   | 16.9% | 450 | 33.7% |
| 合用法     | 41   | 13.4% | 36   | 13.9% | 41   | 16.1% | 40   | 14.8% | 45   | 18.1% | 203 | 15.2% |

1895年の時点では、頻度数では「イベント・環境」用法が最も多いが、1901年以降は、「人・もの」用法が占める比率が徐々に大きくなっていることが分かる。「合用法」は増

減がほとんどなく、1895年から1925年まで15%前後を保っている。図1で、「近代文語UniDic」による表記の頻度数の推移を示したが、「遭」や「遇」が徐々に数が減っている背景には、「遭」や「遇」と結びつきの強い「イベント・環境」用法の衰退があることが予想される。また、図1で頻度が後年になるほど高くなっていた「會」は、「人・もの」用法と結びつきが強いために増加していったと考えられる。

### 3. 国語政策と現代語における「あう」の表記について

明治大正時代の後、昭和に入ると国の政策として使用漢字やその読みに制限を与えようという方針が立てられ、揺れがあった語の表記は徐々に統一されていった。1946年国語審議会の答申で当用漢字表が、1948年には当用漢字音訓表が発表され、その後の公的文書や教科書、新聞などを中心に用字法が整備された。

語彙素「あう」についてどうであったかという点、当用漢字表に登録のある字は「合」「会」「遭」「遇」の4字で、「逢」の字はない。うち、「アウ」の音を持つのは「合」「遭」「会」の3字であり、「遇」は「アウ」とは読ませないとしている。これは常用漢字表でも継続されており、未だに「逢」は使用されず、「遇」は「アウ」の音を持たない。

ここで、前節の2における、表記と意味の結びつきと関連付けて考察をすると、対象語で分けた大分類の「人・もの」「イベント・環境」「合用法」のそれぞれの用法で、優先的に使用された「會」「遭」「合」の3字が当用漢字表に登録され、また「アウ」の音を持つようになったのである。このことから、当用漢字表を定める上で、それ以前に既に各用法に対する書き分けが確立されていたことが推測できる。

一方、「逢」の字は現代人ならば「アウ」と読むことが一般的に可能であるにも関わらず、常用漢字には追加されていない。これについては、『太陽コーパス』において「恋人」用法で「逢」がほぼ独占的に使用されていた状況を鑑みると、文学や歌詞など、表記に自由が利く環境で使用され続け、主に「恋人」用法を中心に現代語においても書き分けがされているのではないかと考えられる。

### 4. おわりに

今回は、『太陽コーパス』を用いて、動詞「あう」の表記について実態と変遷を追うことで、「合」とその他の表記が明治大正時代の時点で書き分けされていることや、表記と語義が段々に固定されていく過程を確認することはできた。しかしながら「アウ」と読む「遇」の消滅や、一度使用頻度の下がった「遭」が何故現代語で書き分けられているのかなど、明らかになっていない点もいくつか残った。

『太陽』以降の昭和時代の用字法、及び、他の語でも、同じ方法で似たような表記の現象が確認できるかの調査などが、今後の課題となるだろう。

### 文 献

- 小椋秀樹、小磯花絵、富士池優美ほか(2011)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規定集 第4版 (下)』国立国語研究所  
 京極興一(1998)『近代日本語の研究—表記と表現—』東宛社  
 田島優(1998)『近代漢字表記語の研究』和泉書房  
 田中牧郎(2006)「『努力する』の定着と『つとめる』の意味変化—『太陽コーパス』を用いて—」倉島節尚編『日本語辞書学の構築』おうふう